
巻頭言

「ことば」からの^{フライト}逃亡か、「ことば」の獲得か

20世紀最大の政治哲学者の一人と称されるハンナ・アーレントは、太古の昔から人間が人間であるための条件の一つを提供し続けてきた「地球」というフレームから人類が「離脱」できるほどの科学技術の「進歩」（人工衛星の成功）が達成されたとき、「人間の条件」の根源的な変化が始まったと述べ、それを「世界疎外（ワールド・エーリアネーション）」という語で示そうとした。人類は「地球から宇宙への飛行と世界から自己自身への逃亡という二重の^{フライト}」の途上にあるという（『人間の条件』ちくま学芸文庫）。

人類の初期段階である「子供たち」の成育過程における環境の変化は著しく、一昔前には、テレビの全家庭への普及に伴って、「テレビに子守りをさせること」の弊害が語られたが、今日では、少子化の現象とオンライン・ゲームやインターネット、さらに携帯電話・スマホの普及がこれに加わり、他者との人間関係における直接的な摩擦・葛藤の間で自分の「ことば」を磨きながら「ことば」によって架橋された「世界」との「関係」の中で育つプロセスを必ずしも経験せずに「成長」過程をあゆみ、成人となるケースが多く見られる。殊に昨今では、ラインというアプリが多くの若者の間で共有され、情報共有が迅速化し効率的になった一方、極めて短い表現で、あるいは、スマホ内に用意された「スタンプ」と呼ばれるミニ画像をクリックすることで、つまり短い表現さえも必要ない方法で「会話」や「応答」が成立する、そうしたライフスタイルが広く浸透している。科学技術の進歩は、生活の細部にわたって「子供たち」が大人になるプロセスの、殊に自らの「ことば」を獲得していく条件を変えつつあるわけである。

大学での少人数学修の場であるゼミでは、意見や質問、コメントという自分独自の「ことば」が求められる。それゆえ、新たなゼミがスタートする頃に見られる学生たちの戸惑いには、こうした時代に共通する背景がそびえ立っていることの反映を痛感せざるを得ない。

アーレントによれば、数学的シンボルの「言語」を取り入れた科学がもたらす技術的知識と人間の「言論」とは根本的に異質であるという。それぞれがもっている独特の経験は、共通の世界に住む人間たちが、それを相互に語り合い、相互に意味づけることよってのみ有意味なものになるのだが、「言論」こそ、互いに自分の経験を語りあい、有意味にする行為そのものなのである。

初めは戸惑いながら、しかし凝縮された「ことば」満載の書物を読み、仲間たちの「間」で発言することの繰り返しの中で、自分の「ことば」を彩り豊かに発信するようになるプロセスは、まさに「創造」という言葉がぴったりするような共通体験となる。するとこちら側の想定をはるかに超える変化に目を見張ることになる。順番に回ってくるプレゼンのために10回以上もテキストを読み込む内的「没頭」と、それを通して自己の中に眠る力を発見し、その力を使いこなすようになる外的「飛躍」を見せてくれる学生たちの姿にはしばしば感動させられる。それは極めてシンプルなことの辛抱強い積み重ねのなかで生まれてくる。しかしこうしたプロセスには、「少人数の場」であるということが、必須の条件だ。「少人数教育」というコンセプトを教育の柱としている本学ならではの、「創造の場」なのだと思う。

多くの局面で「人間の条件」が根源的に、しかもものすごいスピードで変わりつつある現代という時代に生きる若者たちには、「生きにくさ」が伴い続けるのかもしれないが、「大学でのゼミ」という場は、そうした「生きにくさ」にしたたかに抗して「生き抜く力」を内に蓄える、そうしたチャレンジングな場にもなりうるのではないだろうか、またかくありたいと切望する。